

アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(5) —1931年から1932年のサルコリ関連の資料を中心に—

A study of Adolfo Sarcoli's Music Activities(5)
—Focusing on Documents Relating to Sarcoli, from 1931 to 1932—

直江 学 美 (人間科学部こども学科准教授)
Manami NAOE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Associate Professor)

〈要旨〉

本研究では、1931(昭和6)年から1932(昭和7)年の間に日本で書かれた、アドルフォ・サルコリ(1867-1936)に関連する資料を調査・収集し、報告する。

これら資料から、1931年から1932年に日本で行われたサルコリの音楽活動に関する報告と検証を行う。検証をもとに、最終的にはサルコリの音楽活動をまとめ、サルコリが日本の音楽界に与えた影響を考察する。

〈キーワード〉

アドルフォ・サルコリ, 西洋音楽受容, イタリアオペラ

はじめに

筆者はこれまで、1911(明治44)年に来日したアドルフォ・サルコリの音楽活動を調査し、年代順に報告してきた。サルコリが、来日した1911(明治44)年から1912(大正元)年までに行なった音楽活動については「金沢星稜大学『人間科学研究』第10巻第1号」に⁽¹⁾(直江 2016.9: 23-30)、1913(大正2)年から1915(大正4)年については、同巻第2号に⁽²⁾(直江 2017.3: 31-40)、1916(大正5)年から1920(大正9)年については、同第11巻第2号に⁽³⁾(直江 2018.3: 53-58)、1921(大正10)年から1930(昭和5)年については、同第12巻第1号に執筆した⁽⁴⁾(直江 2018.9: 25-32)。

1911年から1912(大正元)年の資料からは、サルコリが「声楽家」として日本の新聞や雑誌に多く取り上げられ、珍しがられていたこと、また、サルコリが当時の日本音楽界に必要とされ、日本の声楽界に新しい存在として受け入れられていたことを明らかにした⁽¹⁾(直江 2016.9: 23-30)。

1913(大正2)年から1915(大正4)年は、サルコリが歌い手としての活動ではなく「指導者」としての活動が多くなったことを指摘し、サルコリの存在が日本に定着した時期と位置付けた⁽²⁾(直江 2017.3: 31-40)。1911年から1912年、1913年から1915年のいずれの期間も、非常に多くのサルコリ関連資料が見つかった。

1916(大正5)年から1920(大正9)年までの5年間に、サルコリは音楽関係者のみならず一般にも広く認識されたことがわかった。また日本の音楽界に与えた影響として、サルコリの歌唱法が、それまでの日本になかった新しい歌い方であったことを「サルコリー式なる独唱」との記述により明らかにした⁽³⁾(直江 2018.3: 53-58)。

1921(大正10)年から1930(昭和5)年までの資料からは弟子が活躍する様子が多く見られた。また、プッチーニやヴェルディなど「イタリア系」の歌を多く歌うサルコリ門下が「イタリア系」と称されるようになったことを指摘した。この時期、サルコリ及びサルコリの弟子たちは、ドイツ音楽中心であった、東京音楽学校の「ドイツ系」に対する一つの勢力として見られるようになっていた⁽⁴⁾(直江 2018.9: 25-32)。

本稿では、続く1931(昭和6)年から1932(昭和7)年の間に、日本で書かれたサルコリに関連する資料を調査・収集し、報告する。それら資料をもとに、サルコリの音楽活動に関する報告と検証を行いたい。なお、1931年から1932年のサルコリの年齢は、64歳から65歳である。

表記は出来る限り原文記載のままとした。■は読解不能の文字とし、()は筆者の補筆とする。

1 1931（昭和6）年のサルコリ関連記事より

1-1 上野と民間，東京音楽学校とサルコリ

1931年に書かれたサルコリに関する記事の数は、1930年に書かれたものに引き続き多くはない。筆者がこれまでに見つけた、サルコリの名前が見られる7件の資料を、サルコリに関係するその他の資料と共に順に報告する。

まず2月17日付『読売新聞』4面、「學藝界・樂團系統分布圖」の記事中にサルコリの名前がみられる。記事は「音楽のパイオニアである陸海軍の軍樂隊でも、又宮内省樂部でもその本来の性質上社會とは一寸縁が遠かった。そこで上野の天下だったのが、茲に過去の上野は妙な時代思想に■■して、その育て上げた音楽家連餘りにも社會的に重要性を帯びて來ると妙に白眼視し、繼子扱ひをしたものだ」と、東京音楽学校への批判の言葉で始まっている（上野とは、東京音楽学校の俗称）。サルコリの名前が見られるのはこの記事の最後で「樂壇に於ける上野閥の崩潰、それは先ず故井上織子のドイツ歌謡曲の獨唱により第一聲揚げられ、續いて浅草オペラ出の藤原義江、ザルコリー門下の關屋敏子に依つて漸次具象化した、声樂のみでない器樂に於て、笈田光吉、井口愛子、鈴木鎮一等皆非上野系の樂人が今日樂壇の最先端に位置してゐる」と、關屋敏子について書かれた箇所、關屋が「ザルコリー門下」とされ、サルコリの名前が見られる。また、この記事では音楽家を「上野閥」と「非上野」という分類で分けており、サルコリ門下の關屋敏子を「非上野」系の一人として紹介した上で、「非上野」が日本の樂壇の最先端であると位置づけている⁽⁵⁾（『読売新聞』1931.2.17）。

サルコリの名前はないが、同じ頃発売された音楽雑誌『音楽』にも「東京音楽学校を批判する座談會」のタイトルで、「上野」と「非上野」の構図に当てはまる記事が掲載されている。この記事は座談會の内容を文字に起こしたもので、座談會の座長は鹽入龜輔（1900-1938：読売新聞記者を経て、『音楽世界』の編集主任）、メンバーは、東京音楽学校の当時の校長である乗杉嘉壽（1878-1947）や音楽評論家の伊庭孝（1887-1937）、堀内敬三（1897-1983）に加え、東京日日新聞記者1名と読売新聞記者4名も交えている⁽⁶⁾（『音楽』1931.3：14-29）。

座談會の冒頭で、鹽入は堀内に會の進行役を託し、託された堀内が次のように會の趣旨を述べている。「従來音楽學校の關係者と民間派の人とが一同に會うて話し合ふといふことは非常に尠かつたのでありまして、此の間、意思の疎通といふことが行はれて居なかつた場合が、餘りに多過ぎたと思ひます。ご承知の通り音楽といふものは必ずしも音楽學校だけが音楽を持つて居るものでもなく、又民間派だけが持つて居るものでもない。つまり是

は全體が持つて居るものであつて（…）御互に和衷協力して行かなければならぬと思ひます。で斯ういふ會合に依つて御互に腹臟のないところを言い合つて、まあ一今後の樂壇の發展向上といふことに就て聊かなりとも具體的の考を、御互に吐露して頂きたい、それが非常に好結果を齎すものであるかもしれません」

この座談會の中で、前述した「非上野」に対応する言葉として「民間派」が使われているのが興味深い。堀内が「従來音楽學校の關係者と民間派の人とが一同に會うて話し合ふといふことは非常に尠かつた」や「意思の疎通といふことが行はれて居なかつた場合が、餘りに多過ぎた」と語っていることから、「上野」「音楽學校關係者」と「非上野」「民間派」は、当時かなりはっきりと意識されていたようである。

座談會では、續いて鹽入が校長に対して、東京音楽学校の目的は「藝術家」の養成にあるのか、それとも「師範教育」にあるのかと問うている。校長は「どちらに重きを置くといふことはないでせう、第一あの學校の組織といふものに關しては、國家の法令といふものがあつて（…）學校自身特別な意思を持つといふものではない（…）現在は兩方やることになつて居ます」と答えた上で、歴史的には「どちらかに重點を置いたかといふと矢張り音楽専門家を押し立て、行かう、教育家としての音楽家ではなく、音楽専門の藝術家を養成しやうといふ考が主であつたらと思ふ」と述べている。

当時の東京音楽学校は、音楽専門家を養成するのが本科で、教員を養成するのは師範科であった。續く校長の話以下に要約する。

本科はその名の通り本体で、師範科は付け加わったものである。本来、音楽教師は音楽学校で養成しなければならないという理屈はなく、高等師範学校で養成した方が良いのかもしれないが、経費や設備などを考えると、音楽学校に併設することになったのだらうと考える。ただ、東京音楽学校の過去の実績をみると、音楽専門家を輩出しても、社會に音楽専門家を受け入れるだけの需要がないので、結局教師になった者が多い。本科を出た人までが教師として働いていることが多いが、實際は教師で満足してはいないと思う（筆者要約）。

校長の指摘によると、東京音楽学校の学生が「音楽専門家」を養成するために設けられた本科を卒業しても、社會に音楽家の需要が無いため、結局師範科の卒業生と同じ、教師になるしかないという。この指摘は現在の音楽大学や、音楽科を持つ大学にも該当するものであり、当時から今日に至るまで変わらない、日本の音楽教育界や音楽界をとりまく現状であると言える。

同じ記事の中に「教師と學生との問題」という見出し

の中で、金子義男（東京日日新聞記者）が「時々我々の耳に這入つて来ることなのですが、（東京音楽学校で）現在自分が師事して居る人に満足しないで、民間のピアニスト・バイオリニストの處に行く、さふいふ場合、学校では極力妨害し妨害といふと誤解があるが行かせないやうにする、是は色々学校としても規則があつてのことでせうが實技を磨くといふ點から言つて音楽會を聴きに行くとか、他の先生から色々テクニクを習ふといふことは、宜いことではないかと思ふ。さう謂つたやうな非難。不平が我々の耳にも這入り込んで來ますから」と、東京音楽学校の学生が、「民間」、つまり学校外の指導者に学ぶことも必要なのではないかと投げかけている。返答した乗杉校長は、当時の音楽学校の決まりとして「現在では他へ行つて教へを受けることは禁じてあるのです。学校組織としては己むを得んのです」と述べている。このように音楽学校の規則として、「民間」で習うことを禁止していることを伝えた校長に対し、さらに伊庭が「それを禁じるのは尤もだけれども、禁じる前に生徒に自由に、先生を選択させるといふことにならなくてはいけない。問題は今、教師より優秀な生徒が入學した時に、学校はどういふ態度を執るかといふことになる」と付け足している。加えて「實際、是は問題ですよ。名を擧げては悪いが、あの人が音楽學校に入學して、若しあの先生が教師であつたら困ることが非常にある。その場合にも音楽學校は生徒に教師を選ぶ自由があることを廣言しては學校として氣不味いが、其處は校長の裁量に於て、手加減を加えてやるといふ位の自由があつた方が宜いと思ふのですが」と、提案している。ここで言われている「先生の選択」に関しては、「民間」ではなく「音楽学校内」での話であるが、西洋音楽受容期において、先生より生徒のレベルの方が高いという現象が起きていたことが分かる。対する乗杉の「僕自身としての考で謂へば、巧い人が入つて來たら生徒にせんでも宜いぢやないか、その人を教師にすれば宜いのではないかと思ふ。（…）現在外國人でさへ教師として迎へて居る位だもの、音楽學校の卒業生であらうと、無からうと、優秀な人であるなら、當人がやらうと承知さへすれば一囑託といふやうな形式で教師にするといふことにはなつて居るのです」との答えは驚くが、前半の「上手な生徒が入ってきたら、生徒にしないで、教師にすればよい」という返事の後、「待つてください、併しですね、例へば……」と伊庭が慌てているため、現実とは遠い話だったとも考えられる。しかし、いずれにしても、当時の教師のレベルは決して高い教師ばかりではなく、教師の教授レベルに関しては音楽學校が抱える問題の一つであったことは間違いない。

続く「學校と藝術家」についての議論で、サルコリの

弟子である関屋敏子の名前が次のように出てくる。「今迄は音楽學校の生徒の中でも、獎來藝術家として優秀な人になれさうな者には、學校がゐた、まれないやうに仕向けたといふことがある（…）教師型の人がいつも學校の寵兒になり、藝術家タイプの人が疎んぜられるといふことになるので（…）最近では關屋敏子の如きは在學優（ママ）迫害されて、遂に退學したといふやうなことが今迄にあつた。（…）活躍するやうになると、變な眼を以て、繼子扱ひするやうな傾きがあるやうな譯で、甚だ困つたことなんです」⁽⁶⁾（同上；21）

当時率直に語られたこれらの内容によると、関屋敏子が退學に至った原因には、外の先生に習つてはいけないという東京音楽學校の規則の問題、「東京音楽學校」と「民間」という派閥の問題、能力のない教師と能力のある生徒の問題、当時の音楽学校内における、藝術家タイプを冷遇し教師タイプをよしとする風潮の問題が複雑に絡み合つてのことであろう。また、この座談会で議論された内容に鑑みると、サルコリは、「民間」であり、「能力のある教師」であり、「藝術家」であり、当時の東京音楽學校が良しとするものとは真逆の存在であったと言える。

1-2 3月以降の記事

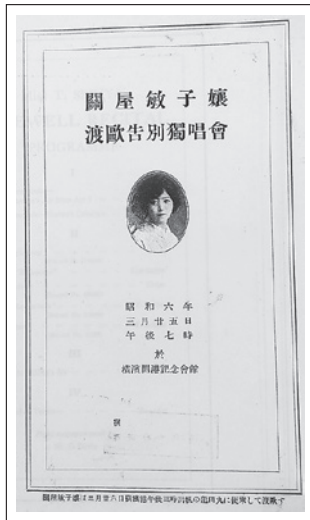
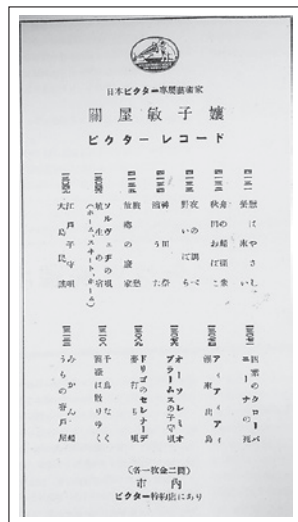
3月以降の記事で、サルコリの名前が見られるものを報告する。3月発行の音楽雑誌『音楽世界』の中にある「楽人消息」に「▲サルコリー氏（聲樂家）四谷區仲町10で聲樂教授を開始した」とある。

続く、3月24日付『報知新聞』朝刊に「關屋敏子嬢の送別會」の記事に付された写真に、サルコリが載っている（写真1）。



（写真1）関屋敏子嬢の送別會⁽⁷⁾（右端の白髪男性がサルコリ）

関屋敏子は、翌日3月25日午後7時の開催で、「渡歐告別獨唱會」を行っている。場所は横浜開港記念会館で、演奏会で配布された『プログラム』⁽⁸⁾を次に掲載する（写真2）。

(写真2)「関屋敏子渡欧告別独唱会プログラム」表紙⁽⁸⁾(写真3) 関屋敏子嬢・ビクターレコード⁽⁸⁾

プログラムの中で、関屋敏子は日本ビクター専属芸術家とあり、ビクターレコードから13枚のレコードを出していることが紹介されている(写真3)。

他にサルコリの名前が見られるのは7月発行の『月刊楽譜』に金子義男の署名記事の文中で、タイトルは「樂人印象記(八) テイコ・キワ女史」である。これはサルコリの弟子である喜波貞子(1902-1983)について書かれた記事であり、当時イタリアで勉強しながら舞台に立っていた喜波貞子を著者の金子が訪ねてインタビューした内容である。文中で喜波は「日本は變わつたでせうね、私は小さい頃四谷から築地の英語學校に通つたものです、サルコリーさんには音楽を習ひました、もう十年以上の月日が繼ちました、一度行き度いと思ひながら」とサルコリに師事したことを語っている。記事によれば「この春に日本に來た、トティ・ダルモンテの夫君ロマンツ氏は彼女(喜波)の先生だったこともある」とのことである⁽⁹⁾(金子義男 1931; 31-35)。

この他、サルコリの名前が10月発行の『月刊楽譜』に見られる。まずは「月刊楽譜二十年史(1)一創刊から大震災まで」と題された、堀内敬三によって書かれた記事に2回サルコリの名前が出てくる⁽¹⁰⁾(堀内敬三 1931; 2-9)。この記事は、タイトルの通り、『月刊楽譜』が創刊された明治45年からの振り返り記事で、一巻ごとの内容が大まかにまとめられている。サルコリの名前が見られる2つを次に紹介する。

第一巻(明治四十五年—大正元年)「寄稿者は(…)サルコリー(前年秋イタリーから來朝)」

第五巻(大正五年)「九月、サルコリー氏アメリカへ行く」

同じ号に松野信太朗が書いた「編輯者であつた私」の中の「加川琴仙氏の事」の章にも「氏は又音楽マネジメントの才もあり當時流れ流れてやつて來たサルコリー氏を拾ひあげてテナーの名手として、わが樂壇に起たせりゴレトの「女心」や「デアボロ」を唱はせて人氣を博せしめたのも裏面に氏一流の宣傳よろしきを得たものでサルコリーが本業の古物商を一時棄て、歌手として樂な生活にあり、つけたのも全く琴仙氏の引立てによつたのがそもそもである」とある⁽¹¹⁾(松野信太朗 1931; 71)。

ここまで1931年に書かれたサルコリの名前が出てきた記事7件、および関連記事を見てきたが、サルコリの活動に関するものは、サルコリが教授活動を開始したという記事の1件のみで、残る6件は、弟子に関する記事と、過去を振り返る記事の中に名前が見られたのみであった。

2 1932(昭和7)年のサルコリ関連記事より

2-1 弟子たちの活動

本章では、1932年に書かれたサルコリ関連記事を見ていく。5月29日付『読売新聞』夕刊2面にサルコリの名前が出てくる記事が掲載されている。この記事もサルコリ自身の音楽活動に関するものではなく、弟子の三浦環に関する記事である。「ながい間異境の空で歌行脚を続けてゐたメゾ・ソプラノ歌手三浦環女史が十一年ぶりで歸朝、廿八日午前九時東京到着の列車で上京驛頭には女史の歸朝を待ちあぐねてゐた母堂永田とわ乃自がフォームに降りたつた三浦女史と抱きあつて嬉し泣きにひさびさの對面を喜びザルコリ、ローシー(…)」⁽¹²⁾(『読売新聞』1932.5.29)。三浦環の11年ぶりの歸国に関しては、サルコリの名前は無いが7月号の『月刊楽譜』に「上野時代の三浦環女史を偲ぶ歓迎會が上野の人々によつて萬平ホテルで開かれた時のスナップ」の題で写真が掲載されている⁽¹³⁾(『月刊楽譜』1932.7)。

7月16日付『東京朝日新聞』7面には、久しぶりにサルコリの名前が大きく書かれている。「在留二十年—サルコ

リー氏謝恩演奏門下の人々が發起して」と題した、演奏会の情報である⁹⁴ (『東京日日新聞』1932.7.16)。

「我が樂壇がまだ幼稚だつた頃—明治四十四年に來朝、テナー歌手として、又マンドリン奏者として當時の樂壇に非常な人氣を博したイタリー人サルコリー氏は、その後帝劇の開場と共に歌劇部に入りロシー氏と共に指導に努め、我が國オペラ上演の先驅者として知られてゐるが、氏の門下からは三浦環夫人を始め、現在イタリーで歌劇歌手として活躍してゐる喜波貞子、關屋敏子、原信子、川崎氏豊(ママ)等の優れた歌手をだし、我が樂壇に貢献するところ少なくない、ところがその後サルコリー氏は民間に私じゆくを開いてゐるのみで、表面に立つ事をしなかつたため、氏の功績はあまりにも認められず、ほとんど世人から忘れ去られんとしてゐるので、これを遺憾として歸朝中の環夫人を始め、現門下の小原威子、三上孝子、橋本花子氏等が來る二十八日夜、日本青年館に老いたる恩師のため謝恩演奏會を開き、始めて氏の二十年余にわたる我が樂壇への貢献に酬ふこととなつた」

この記事によると、帰国した三浦環をはじめとするサルコリ門下が、7月28日にサルコリに対する謝恩演奏會を開催するとのことである。しかし、この演奏會に関しては、プログラムや、その他の記事が見られず、実際に開催されたかどうかは確認することが出来なかった。

一方、三浦環は、7月30日に、サルコリ、ペッツォールド両氏のため謝恩演奏會を開催したことが、写真とともに『月刊楽譜』9月号で紹介されている(写真4)。



(写真4) ペッツォールド、三浦環、サルコリ⁹⁵ (『月刊楽譜』1932.9)

この写真は、「上野」(ペッツォールド)と「民間派」(サ

ルコリ)が三浦環を挟んで両隣に並んでいることになる。三浦環は「上野」出身であり、卒業ののち「民間派」サルコリの元に学んでいた。加えて三浦は当時日本を代表する声楽家であったことから、「上野」と「民間」の垣根を超える存在であり得たことを象徴する貴重な写真と言える。

10月18日付『東京朝日新聞』夕刊2面にも、弟子の活動に関する記事にサルコリの名前が書かれている。

「テナー川崎豊氏歸朝」のタイトルで「劇的テナーとして有望視されている川崎豊氏が廿日神戸入港の白山丸で歸朝する。氏は陸軍戸山學校軍樂隊出身唯一の歌手でサルコリに師事し、イタリー歌劇を学び、渡伊後、同國屈指の教師コットーネに学び、前メトロポリタン座歌手としてジーリ等と共に名聲を博したセンブリニに師事し、歌劇歌手としての必要な訓練を受け、氏の推挙によりラ・スカラ座に次ぐ歌劇座においてリゴレット、トスカ等の主役を演じて好評を得た、この夏スカラ座の試験に應じて通過し、錦を故山に飾る事となつたのである」とある⁹⁶ (『東京日日新聞』1932.10.18)。

1932年に日本で書かれたサルコリ関連の記事は、この4件のみであったが、1931年と同じく、サルコリ本人の音楽活動ではなく、弟子や門下の活動記事に名前が見られるのみであった。弟子たちが一堂に会する謝恩音楽會が1932年に企画されたようであるが、実現したという記事などはなかった。

4 まとめ

本研究では、1931年から1932年の間に日本で書かれた、サルコリに関連する資料を調査・収集し、その報告と考察を行なった。

この2年間に書かれたサルコリ関連記事は非常に少なく、またサルコリ本人の音楽活動に関するものは、教授活動の開始に関するもの以外は見つけることができなかった。その他、サルコリの名前が出てきた記事は、弟子の活動に関するもの、過去に関するものが大半を占めた。

サルコリが5年後の1936年に死去していることに鑑みると、1931年から1932年は晩年にあたり、演奏活動は行えなかったようである。この時期サルコリの記事が減る一方、弟子たちが音楽雑誌や新聞に取り上げられる機会は多くなっていた。サルコリ自身も、教授活動を行ったり帰国する弟子を迎えに行ったりと、弟子に関する活動は続けていたことが分かった。教授活動に関しても「再開」していることから、弟子の育成には積極的な気持ちがあったものと推察される。

筆者はこれまで、サルコリの弟子が育ってくると、サルコリとその門下が東京音楽学校の「ドイツ系」に対す

る一つの勢力として「イタリア系」とみられるようになったことを指摘している⁽⁴⁾ (直江 2018.9; 25-32)。本研究で調査範囲とした1931年から1932年に書かれた資料には、「上野」や「東京音楽学校関係者」, 対して「非上野」「民間派」などと書かれることが多くなっていた。当時の日本音楽界は、東京音楽学校とそれ以外「民間」のくくりがかなりはっきりと意識されていたようである。

サルコリは、「民間」であり、「能力のある教師」であり、「芸術家」であった。そしてこれらサルコリの立ち位置は、当時の資料から考察すると、東京音楽学校が良しとするものとは真逆であることが浮かび上がってきた。サルコリが死去する1936(昭和11)年までの残る4年間についても引き続き調査を続けていく。

引用文献

- (1) 直江学美 2016「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(1)」、『金沢星稜大学人間科学研究』第10巻第1号, 23-30頁。
- (2) 直江学美 2017「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(2)」、『金沢星稜大学人間科学研究』第10巻第2号, 31-40頁。
- (3) 直江学美 2018「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(3)」、『金沢星稜大学人間科学研究』第11巻第2号, 53-58頁。
- (4) 直江学美 2018「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(4)」、『金沢星稜大学人間科学研究』第12巻第1号, 25-32頁。
- (5) 『読売新聞』1931「學藝界・樂團系統分布圖」。2月17日付, 4面。
- (6) 『音楽』1931「東京音楽学校を批判する座談會」。『音楽』第12巻(東京音楽学校校友会) 14-29頁。
- (7) 『報知新聞』1931「關屋敏子嬢の送別會」。3月24日付, 4面。
- (8) プログラム 1931「關屋敏子渡歐告別獨唱會」。
- (9) 金子義男 1931「樂人印象記(八) テイコ・キワ女史」。『月刊楽譜』(月刊楽譜発行所) 20巻7号, 31-35頁。
- (10) 堀内敬三 1931「月刊楽譜二十年史(1) — 創刊から大震災まで」。『月刊楽譜』(月刊楽譜発行所) 20巻10号, 2-9頁。
- (11) 松野信太郎 1931「編輯者であつた私」。『月刊楽譜』(月刊楽譜発行所) 20巻10号, 71頁。
- (12) 『読売新聞』1932「驛頭, 待ち焦がれた母堂と嬉し泣き」。5月29日付, (夕刊) 2面。
- (13) 『月刊楽譜』1932「グラフセクションより」。(月刊楽譜発行所) 21巻7号, ページ番号記載なし。
- (14) 『東京朝日新聞』1932「在留二十年—サルコリー氏謝恩演奏門下の人々が發起して」。7月16日付, 7面。
- (15) 『月刊楽譜』1932「グラフセクションより」。(月刊楽譜発行所) 21巻9号, ページ番号記載なし。
- (16) 『東京日日新聞』1932「テナー川崎豊氏歸朝」。10月18日付, (夕刊) 2面。